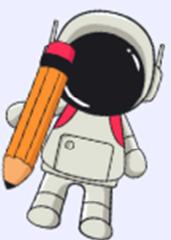




未来の
あさひつご物語



未来のあさひっこ物語 その1



わいさんが二十歳になった春、尾張旭の空には静かに浮かぶタクシーが行き交っていた。社会実験として導入された「空飛ぶタクシー」は、まだ乗れる人数も限られていたが、市民たちの目を未来へと引き寄せる象徴のように存在していた。わいさんは市長のそばで、その動きを見届ける私設秘書を夢見ていた。政治家として、このまちをもっと盛り上げたい——そんな気持ちで胸を膨らませていたのだ。

一方、太郎さんは県外の高校で農業を学び、いまは産業大学の大学院を受験しようとしていた。農業を「推し活」のように楽しみながら、秋田小町のブランド米を現代的なビジネスにつなげる研究に取り組んでいる。そので発信する彼の姿は、農業を「かっこいい選択肢」に変えていこうとする若者らしい挑戦に満ちていた。

ふたりは久しぶりに「バーチャルシティおわりあさひ」で再会した。ヘッドセットをつければ、世界中から人々が集まり、尾張旭の未来像を共有できる仮想空間だ。そこで開かれていたのは「矢田川の河川敷祭り」の未来企画会議。実際の祭りではドローンが夜空に模様を描き、川面に映る光と音楽が市民を包み込む。その様子を想像するだけで、参加者は胸を躍らせていた。

会議のあと、ふたりは平子の森に向かった。森の奥には、秘密基地のような地下施設が広がっている。ここは文化に触れあえるセンターでもあり、アートや演劇、伝統芸能から最新のテクノロジーマで、誰もが自由に体験できる場所になっていた。地下とは思えないほど明るい空間で、世代も国籍も超えた人々がつながっていた。

「ここなら、住民が本当に満足できる暮らしが作れるかもしれないね」

「農業も、まちづくりも、結局は『つながり』が命だと思う。僕は食で、君は政治で。方法は違って目指すものは同じなんだろうな」

夕暮れが近づくと、三郷ヒルズに灯りがともった。高層マンションの一角には英語カフェがあり、子どもたちが外国人講師と自然に会話していた。大人たちも仕事帰りに立ち寄り、世界とつながる時間を楽しんでいる。窓の外に広がる矢田川と森の緑は、未来都市でありながら尾張旭らしい落ち着きを失ってはいなかった。

その夜、河川敷では風に揺れる提灯が並び、ドローンが描く光の橋が空に浮かんでいた。笑い声と音楽が混ざり合い、川のせせらぎと一緒に町全体を包み込む。未来を夢見ていた子どもたちは、今やその夢を自らの手で形にしようとしていた。尾張旭の夜空には、希望の光がゆっくりと広がっていた



未来のあさひっこ物語 その2



Hina(18歳)は、尾張旭の街を見上げて目を丸くした。透明なドームの中に広がる街並みは、未来的なのにどこか懐かしい。ドローンが買い物袋を運び、エアージュウオーグの道の上では人々が空気の上を歩いている。

隣に立つGemi(20歳)は、少し誇らしげだった。彼はこの街で育った未来のあさひっこで、Hinaは遠い国からやって来たばかりだった。

「ここでは、子ども同士の異文化交流が対価になるんだよ。君が自分の国の歌を教えてくださいたら、僕は尾張旭の棒の手を教える。そうすれば、互いに新しい力を持ち帰れるんだ」

Hinaは小さく頷いた。AIが同時通訳してくれるから、言葉の壁はない。でも彼女は、Gemiが言葉に込める温度を、自分の耳で感じ取りたいと思った。

「ここって、グローカライズしてるんだね。世界とつながってるのに、地域の文化もちゃんと残ってる」

「そう。棒の手も外国の人が習っているし、音楽やお祭りも一緒に楽しんでいる。国っていう概念は、もうほとんど意味を持たないんだ。」

二人は歩きながら、巨大なメガネの前に立った。そこに入れば現実そのものがくろくに切り替わり、過去の尾張旭や未来の宇宙都市を体験できる。国境も時間も消え去る世界。しかし、Hinaはふと不安そうに呟いた。

「でも…不老不死とか、精神を肉体から離すとか、ちょっと怖いよ。もし心までデジタルにってしまったら、本当の私が消えちゃう気がする」

Gemiは真剣な目で頷いた。

「僕もそう思う。歴史が示しているんだ。技術が進んでも、人は郷土愛とか、人と人の関わりを忘れたら暗黒世界になっちゃう。だから僕らはデジタルとアナログをちゃんと分けたさ」

Hinaは少し安心して笑った。

「そうだね。じゃあ、私は君に私の歌を教える。そのかわり、棒の手を教えて。」

「約束だよ。」

夕暮れ、城山公園の丘に登ると、瀬戸の森が茜色に染まり、ドームに反射した光がきらめいていた。遠くから和太鼓の音と子どもたちの笑い声が重なり合い、未来の尾張旭は、世界とつながりながらも、人の心が根づく場所として息づいていた。



未来のあさひっこ物語 その3

十年後の尾張旭市は、かつての静かな住宅地から大きく姿を変えていた。けれどその変化は、どこかやさしい。高層ビルや派手なモニュメントが増えたわけではない。むしろ、町じゅうに風の通り道のような自転車専用レーンが広がり、緑と人の笑い声があふれている。

「こゆる、こっちこっち！」

二十歳になったかいるは、青い自転車を軽やかに走らせながら妹のこゆるを呼んだ。十八歳のこゆるは追いかけるようにペダルを踏み、二人は丘を越えて、町の中心にそびえる古びた大学へと向かった。

この大学は十年前、閉校して以来ずっと使われていなかった。だが今は「町おこし」の拠点として再生されている。昼は国際交流の場、夜は期間限定のお化け屋敷。今日はちょうど外国人留学生たちが企画した「世界の怪談ナイト」の日だった。

大学の正門をくぐると、カラフルなランタンが風に揺れていた。英語、中国語、ベトナム語、日本語……さまざまな言葉が飛び交い、笑い声が混じり合う。子どもたちは言葉が通じなくても一緒に走り回り、ボールを投げ、追いかけてっこをしている。かいるとこゆるも自然にその輪に混ざっていった。

「昔は外国の人と遊ぶなんて、こんなに当たり前じゃなかったよね」
こゆるが息を整えながら言う。

「そうだな。でも今はもう、毎日の景色の一部だ」
かいるは誇らしげに笑った。

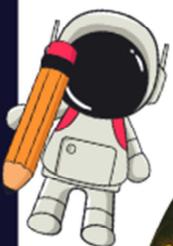
夕暮れが迫ると、大学の講堂が暗転し、いよいよお化け屋敷の始まりだ。中には各国の怪談を再現した部屋が連なっている。日本のろうそく揺れる座敷、インドの化け物の影、ブラジルの森に潜む怪鳥……。恐ろしさよりも、その文化を五感で感じる面白さに、子どもたちは次々と歓声を上げた。怖がって泣き出した小さな子には、外国人のお兄さんが優しく手を引き、外へ連れ出してあげる。その光景は、町全体の新しい「当たり前」を象徴して夜が更けた。

二人はまた自転車に乗った。丘の上から見下ろす尾張旭の夜景は、相変わらず穏やかで、でも確かに未来を映している。森林公園の木々は月明かりに照らされ、静かな池には蛍の光がちらちらと浮かぶ。遠くで子どもたちの笑い声がまだ聞こえていた。

「ねえ、かいる。十年後のさらに十年後も、この町はきつと面白いね」

「もちろん。未来のあさひっこは、まだまだこれからだ」

二人の自転車は軽やかに坂を下り、尾張旭のやわらかな夜風の中へと消えていった。



未来のあさひっこ物語合体

わいさんが市役所のガラス張りの会議室から外を見下ろすと、尾張旭の街は透明なドームに包まれ、夕陽に照らされて淡いオレンジ色に輝いていた。空には社会実験中の空飛ぶタクシーが滑るように飛び、エアークの道では市民たちが空気の上を散歩している。彼はまだ二十歳の若者だが、市長の私設秘書になることを夢見て、まちを盛り上げるプロジェクトの一員として奔走していた。「政治は人をつなげる仕事だ」と信じている彼の視線は、常に未来を向いていた。

一方、太郎さんは県外で農業を学んだ後、尾張旭に戻り、三郷ヒルズの一角で実験的な農業ラボを運営していた。推し活の延長のように「秋田小町」を研究テーマに据え、ドローン配送とAI分析を駆使し、米作りを世界に広めようとしている。「農業だってグローバルイズの時代だよ」と彼は笑う。彼の夢は、地元の農産物を現代ビジネスへと昇華させ、尾張旭を「食の最先端都市」に変えることだった。

かいるとこゆるの兄妹は「健康都市」プロジェクトに関わっていた。使われなくなつた大学をリノベーションし、外国人と子どもたちが一緒に遊び学べる場に変えていたのだ。昼間はキャンパスがウォークラリーと健診ゲームの舞台となり、夜になるとお化け屋敷として賑わう。「楽しみながら健康を意識できる」——それが二人の提案だった。こゆるはまだ十八歳だが、言葉より笑顔で人を引き込む力があり、かいるは二十歳ながら柔らかい視点で異文化の子どもたちをまとめていた。

エミは十八歳になっていた。十年前、初めて尾張旭の街を見上げたとき、ドームの光景に目を丸くした少女はいま、多言語を自在に使いこなし、英語カフェやバーチャルシティで外国人の若者と交流している。棒の手を外国人と一緒に演じる企画では、伝統芸能がグローバルに再解釈され、まちは歓声に包まれた。「国という境界はもういらぬ。ここでは誰もがあさひっこになれるんだよ」と彼女は言う。

Genは二十歳。かつてEmにこの街を誇らしげに案内した少年は、いまや「バーチャルシティおわりあさひ」の開発チームの中心にいた。VR空間のなかで歴史の世界を体験でき、数学が物語の形で語られ、誰もが自分のペースで学べる「学校なき学び」を実装したのだ。飛び級も当たり前になり、子どもたちは個々の才能を自由に伸ばしている。彼は教育の革命を担う若きリーダーになっていた。

六人が再び顔を合わせたのは、矢田川の河川敷祭りの日だった。エアークを渡ると、提灯の光が川面に映り、反重力都市のような浮遊ステージが出現していた。太鼓の音とドローンが描く光のアートが交錯し、森の中の文化センターでは世界各国の音楽や舞踊が次々に披露された。そこに国境はなく、ただ「共に楽しむ」時間が広がっていた。

「街全体が病院のように人を支えて、でも遊びも学びもちゃんとある。そんな尾張旭を、僕らで作ってきたんだね」Genがつぶやくと、わいさんが頷いた。「政治も農業も文化も、全部つながって一つの未来を描いている。僕たちの役割は、つながりを絶やさないことだ」

その夜、六人は平子の森の地下基地に集まった。壁一面のスクリーンには宇宙エレベーター都市の構想図が映し出されていた。尾張旭から天空へ、そして宇宙へとつながる夢物語は、もう遠い未来ではない。小さな中小企業が「中小企業のGoogle」と呼ばれるほど進化し、その技術が宇宙へ挑戦する力となっていたのだ。

Emは微笑んで言った。「デジタルとアナログを分けて考えるのは、もう古いかもしれない。でも、私たちの郷土愛は変わらない。この街で育ったという事実が、どんな未来でも私を支えてくれる」

森を抜ける風が、六人の会話をさらっていった。遠くで瀬戸電が地下を走り抜け、景観を守った街並みには静かな灯りがともる。矢田川のせせらぎ、棒の手の太鼓、提灯の揺れる光。尾張旭の未来は、技術と伝統、グローバルとローカルが調和する場所として輝き続けていた。六人の未来のあさひっこたちは、その真ん中で笑っていた。